

和蘭文

白

和蘭文



Vertical columns of faint, illegible text within a rectangular border on the left page.



秋楊枝序

先達て世より廣く一休の竹氷物だの支
偏にまきこび中り地をるまふたけ巧なる
一は東坡山若くもあも小指の角と嚙家新
に友丞相と松梅の竹よ遊ばせ給え程の
筆作なり何よの是と讀でらむとくさ
あつて根云済語ハ人と導んまめの橋を
虚といく實と志くしむハ蔭子が寓そよ

等しく如流煙古れ舞は舊女の大意とく
且禪法の場をれよとわされば老相尚れ
古いとくはく人の志をくづくもれ流に
と清きぬりて底深き道よ首をけ打込生
死の悔しめを押きて海世の波よ振るる
流波そのうらね心をせげ給て拈こ
ち幽き枝折垣のうらなる竹の蔭の葉
をるは流しこれ事以書あけゆるるれは教醫者

此竹が身に上とツひおんを織るにやあは
 とをけるうみゆりをもとむの時代よあは
 世のあはれもあはれおんを三聖三哭の親を
 此る紙の方人ともうすは事のとと
 やりよえ候きりうはあはれ女の六十に候
 よ免とろりあげあは事よをよせき
 院中と一翁の食しめらあはれもと人
 とのつと齒の根ををのりげをせんとも
 杖楊

校こ云ををひおゆを紙の根と足
 ぬけさやおんをひひと二人よそののり
 およ作を織てひるあはれはけをる
 多きり繩もとりあわりとやつたの
 かり一具を織と味とあはれ我思ふ
 と遂たるあはれん于時あはれ七の
 城は城里本予一みらり云者麻生
 又居へ是と金一六冊とあはれや

松揚枝第一

竹葉不食負樂

一体竹葉初白對

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

二卷

不動此初志

悪女の死

不きふ死此妙菜

情法法む

三卷

猿が泥殺生の抜白

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

穉れ家と氏祿とあり

當話よこまろ山外

河豚汁此呪

四、卷

嶋田少竹舟子振

とい海舟狂奇

一休己者と同巻

一休録と絶入

淋病の毒性

五、卷

竹舟仲人口

鼻汁下の療治

六卷

竹舟のまゝしん

竹舟のまゝしん

付終の輝世

大抵持致の圖

同録終

松楊枝才一

作亦不食貧樂

日外世より作亦不食貧樂... 此の才也... 松楊枝才一... 作亦不食貧樂... 日外世より作亦不食貧樂... 此の才也... 松楊枝才一... 作亦不食貧樂... 日外世より作亦不食貧樂... 此の才也...

とゆふも何じが来るもいと成る事候と
これよりなほ時の中をまことと入るやあらう
いれなむとほむやうとくときもあらう
よ野ととたなり草葉とのつと口をわけて
なめてばしよ食わげなめげしてなうらんと
ひわらうらうらうらうらうらうらうらうら
あうらうらうの中よ、樹木の葉とくを
すきば針のにおもくもさびく目星の光を
しらくくよものなる果しをわけて又二葉に
指添ふけがれ僅に人のあはれとす

蛇の尻よりうらうらうらうらうらうらうら
すき候もひくわらうらうらうらうら
はたよ後し書もの反古なりお別れの
りもさう、只おぼろの長きべり決まの
しほとさうまうらうらうらうらうら
貴のく大豆蛇のうらうらうらうら
後よ引分ちんわらうらうらうら
よ、いふと波筋とあまひ電の下と
ふとようらうらうらうらうら
そのいふをうらうらうらうらうら

しるる道てらひし事なるまへんはありとてなるの
もよりありし門外はまをたれはげゆるわたり
よけ物おきし事なるまへんはありとてなるの
よの使の事りるは物なるまの山は火打石角井
はあつた右中をいゆふふそと物えをり
大書わけめ何よそ方性よそけ書なるまへん
かむ書染扁鶴よ書し書人まらまらありびり
せしそとまらまらとまららるる作物をあつそと
まらふま書ていしとるまらまのせりやとるまら
のまらまも書清まら川色よ書なるまらまら

海く海は信書の特毎よ出現しるまら書
おりのまらも書世と人よ書せん作物使美なる
物まららししとて神よ何毎のまら書あけと
奪し家野書はよしとてはあよとるまら書
の神はまらつららとてまらまらまらまらまら
おりそへも書なるまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

とつひくわつうく見えをれハ竹葉も深紅也

おろしとまきりて

恨まびやうし神ふあるものを

歌まららなんぬを情まれ

こら後てより先つ脈をのんうこなる着病

のとのと竹葉うりやうをほしくをなめ

右きるう無さあふる折あくる肩をさうりめし

こころり抜きふる腐まもこころあはせあえ

こおりやまもをさぬ人こ神よさうりつこは

いなるはらうそやとまてはく入あとの事

かこまねをのこおしハ竹葉すてりや脈のあ

がひてこをまそりごころりてゆんたまるを

そはをらうものどもをさうて竹葉うぬすの

何と血塊はをや脈ハ性まゆるものともいふ

もやういあをましとそやもいさうりしをま

そえうよてとつ度血塊して結まこと歌く不

度力又指掌あてんれはなち長よ脈すまやまり

竹葉をぬららあうりや極ハ素体の名醫竹葉

のころ民家よ来てはまて病人秋威よ恐て

しを脈もあえまるとのなをりめ此竹をうりは

平後ろくしとのふ美話と始つたのよめも
ほろほろとくぬのいろもくちねわしとていひ
ありあふくして竹歌懐中のお袋もくちね茶と
おちめとのとりゆわくわくおまはつ編の段も
伝心して急使報と見えよとてさみしくおまはり
のくまひしよあまら茶師竹歌とぬき八何とす
ゆゆ茶あつくいそやありしこととて伝ひくろそ
時竹歌友の臂とくちねあつねひくろし
そまはあまらく先祖まらくあまらその名とゆ
青黛大はらり相傳の妙業炭團敷とて書

よきこととめいよは沙茶うみそはわきうかひ
ざりしこととまねたもこの火つけよとてぬ
りのなまはつていとつひかぬおもはれあふん也
大さの秘方いととてとてあるお傳えて
おまらあつてはつちの梅樟の黒鏡なりとゆふ茶
まらてさそとをこれいさぬらる火つけあてい
とつ竹歌のつねまらむいそとてこの驚おまの
おまらえまらけお人へ下焦の火送上唐煎の
おまらえはけぬ本の炭とおめしておまら
のとりゆとてげは後中あつくちんせんとも

りこと見めらるるしあまわつうの小雲ありま
高のそけいの使務ありとれが親の目よ真と喰て
うそまらるるくららのもろを前のもろもろ
おとるれ人の儀よしをちかりけゆことをせ
けりも様えれのとく中の中をちかりあり
けよなりて鼻の下らうらまふの救の天候
とゆきまけらまうけおんまらるる中よあひして
よくひけらへらる救候はらとんでらるる
世人わらぬ名と對てあひ佛とていひくもら
るる事とて是を佛とてあつらるる事とてあつら
るる事とて是を佛とてあつらるる事とてあつら

肝とはぐり自是之真神ぞといふは文佛と
吾の幸なる人といひんためはとくくはらひ
あつらるるじとらふらして佛神のあまらるる
縁いと云傍の曰汝智わらも急なるやを
らをもせしなり竹杖すて智老よをての智老
よひんを急なりとの不若傍の曰佛神なりと
て神を急なり佛神矣なりと見らハ汝も
あつらるとまり竹杖智くくそのまらひとは
何りのそ眼あのか境場をいとのあま竹杖後と
まらるる

部ありて和尙之振れわまりは無料なり
 多れ山伏あまといれど又大まと山とトハあをも下
 奉平たい國こく家か安全あんぜんの護ごとて又ハ女にの由よし
 山とさ料りょうあらざるも吹ふして多おほわまりか
 くか何なにに多おほれお中ちゆう馬ばれはと切き之のをも定さだめ菓こ乃の故こ
 とむくさくも成なり付つててま洞どう一いつ後ごなげお
 多おほふ山伏あま是こゝと月つきおしりけも幕まくら内うちんかけまりき
 け小こ今いま一いつ後ごと乞こて又また貝かいとそ吹ふしてけり一いつ体たいあまり
 小こ相あせりきたりめりておるおるるとて又
 中ちゆう馬ばへ入いられけり山さん外がわもふけりて人ひとの神かみといひ年としは

とつひ寺てらの他ほか合あはさう振ふ舞まいくれいでおとんと
 ついてあけけりて同どうおと観かんわしきあさうて
 目めと又またぎん中人ちゆうじんでそいけり又またけり和尙わじやうの
 性じやうひひやま方かたうおとそ世よはつとそんんわたりり
 あつと申まをふて一目ひとめ小こ眼まなこおれまなり隔へきてお
 方の山さんおれてふよわおまきとさけまはとそお
 ころれ目のゆめをしりなるとぬくふ
 身みあささるころまをたらしん
 竹たけあしゆく
 世よ中ちゆうよとてしりかたりきん

山伏いふくを扱していふ屋をもれきや
いもいさちと我が家は侍りし時より
らうゆてくらあきて趣あそき人こそとめ
しりきり一体まられいてくまざらてんきん
あつていさむらえしつてんきん試のなる
そと心外なるはちりて結とんきよりそ
尾くくくらあきくまざらてんきんが
きり山外まらて居とくれとの教へをき
仏はとあつていさむらえしつてんきん

とゆくく口をふりては帳をか紙入らして
腰よきり一体くくくとあつていさむらえ
よめつひけしなりまきかきつてり六割のめい
えきりくもや不自由なる結御りあそい口を
くめく笑ひあふ山外は是も我情と起し
家け力かき進ハしそとらひくならそれ
あつていさむらえしつてんきん
えとくハ汝我れ子よあつていさむらえ
体けらるるまでよあし中子よあつていさむらえ
らりんきとあつていさむらえ山伏は偏よあつていさむらえ

てやせむをめて有らりありあり海唇一むれをえせ
きたるお海邊をゆくちりりく中子よあうんと
宮らひきる山休きへりくるさよあひとひりせ
下中へあむすひえぬまを陀羅尼居るたり
ぬしりく大下あおやととるくぬきとと更く
あうりあうりきり一体作ける八日中れ唇ハは
ちやてらくゆりしりあれりれ是骨るす
ハ難海ハゆれましとてとと抱て笑ひあふ山
休面目と笑ひくハもあうりてんもくハ一体
のいりくくふもゆれまはなぬまてしとくゆ

このとらや一足もんえゆるをさりとて我
ゆかと思せざりしといふりてあのととらりて
んをへりてんもゆりあなよ食とんをゆへ
くるせらうたよや尾と抱て来り一体ハはひさか
おあひとゆてぞおやまゆりきるその時あち
二三人の縄ざれとた物してけたのは是は
ひさきよまよひをんも作れはふあひりて
いふやうそれかゆきとゆりやうあつてけりはり
廣云とてする縄志がりてしきうとをんは
推系たりとて月はとらあゆひのきり一体

さうやいやとよ笑ひ言わさ山依文のわら
つら名えりかきつらみて日中流さうこまくら
動てしつてい方がきしかしむらひ仏法入唐
の後吾もは信つとれし根年の唐志つりこ
いふの本業しつていまこまめこまをとり
いふよ思つてもかともとまらりてか
繩とよまわれあともくしむまにまらりよ
なりて花掛りし依かじよまきとまらり
嘴多かりよ八角のいの本持とて辨ひおん
しと探りしよまらりつと味かばとまらり

あはれし西とけりてしけりてはがた
く味てしつてまらりよまらりて一体を
あつらひまらりくまらりてのつら
まらりてあつらひまらりてのつら
と奥しまらりてまらりて
まらりてまらりてまらりて
まらりてまらりてまらりて
まらりてまらりてまらりて



忍女の歌立

去るまじりしは落つてきつましくなりしもお一体
 と竹女が室より入て事あつらひいとてか
 一まゝのつれまの物や程とて膝の芳より
 女の初めえられはうぬは内あつはと修めれ
 よ竹女やうなてはあけけらぬわあさほれ
 ほよおほ座ついにほぞの中あけては日はんいよこせ
 りんしなまゝ女のもゆふふあをと延川は
 へのあまはあ年よりけり御方小頼を以味
 まのつれまがもくや年よりけり縁を以味

何れなきにばいそまむよりハ跡とらト群るるぬ
うらねやういとならひとそりせらる一休坐すはな
やううしうあゆいこをへしそ作せうま時女
座あつはりくと痛出わあへ新面りて治やま
なをこしくまはひちりしりこせらるまは親むら
夏落の膝まんまの骨あごやう小白粉とまを
ど種後の衣あごよりてまいでんの中小あまり
か登の小町かなりるく関あまよがろとまを
一あごゆりてまはひとまはつるまはつるまは
一いそまむしやううらねやういとならひとそり

氏あきてもむのちよはる響ひわりと控とあ
卯條さうりま君小晴とらりるあうりし玉
の響ハ石付とてまをて紙よりあうりまのりそ
まの甲斐の横場へあへんまをてあわあへんま
まをてあわいさまをて目今お千余列の中よあれ
ひてりうらうらまをてあまをてあまをてあま
そけんてりあまをてあまをてあまをてあま
後のあまをてあまをてあまをてあまをてあま
まをてあまをてあまをてあまをてあまをてあま
胸まをてあまをてあまをてあまをてあまをてあま

珠五のハビPより海鏡生付おろさく双眼のらひ
鼻筋のつひ身せく頬先口の廻りまてく下よ
又とある来るうと松崎切門巖崎なりともいふそ
ゆいよのしやまきうんをる竹女の福津をゆいお
まけまの女んよ液のがめ河をい野ひて野の橋
なるゆよりり中差がのひさどし世櫻河のよく
なる同うしら河志のわきをせりく人ゆともろふ
ぬりう先小押あてたきとつとねくたおろして呼鳴
静かやむしりやわる橋よの河をつらうおそらう
やあれたいなるおくと廻りかいたおしんばらうけり

あうけり尾同つらふよふかうきかちる笑とませ
し一体とまやりぬらそのふつさハわさう千星の
とせぬうよわらうまやしとさんらととんだらふ
しとど一体真ととまてわとれそわたりま
まらうる危い何とPととわりそれハ竹新うをゆり
それハやまき方よ名Pし射はらるとPしてととガハ
まうのまきふひわらうしとつけPしとふハねまやる
まの面持をらうしとわへは竹がわがらうしわ
かいついまらうらふとてらゆくと嘆ひけ
ひて作らうハさそや足平一而よなまの何ふ

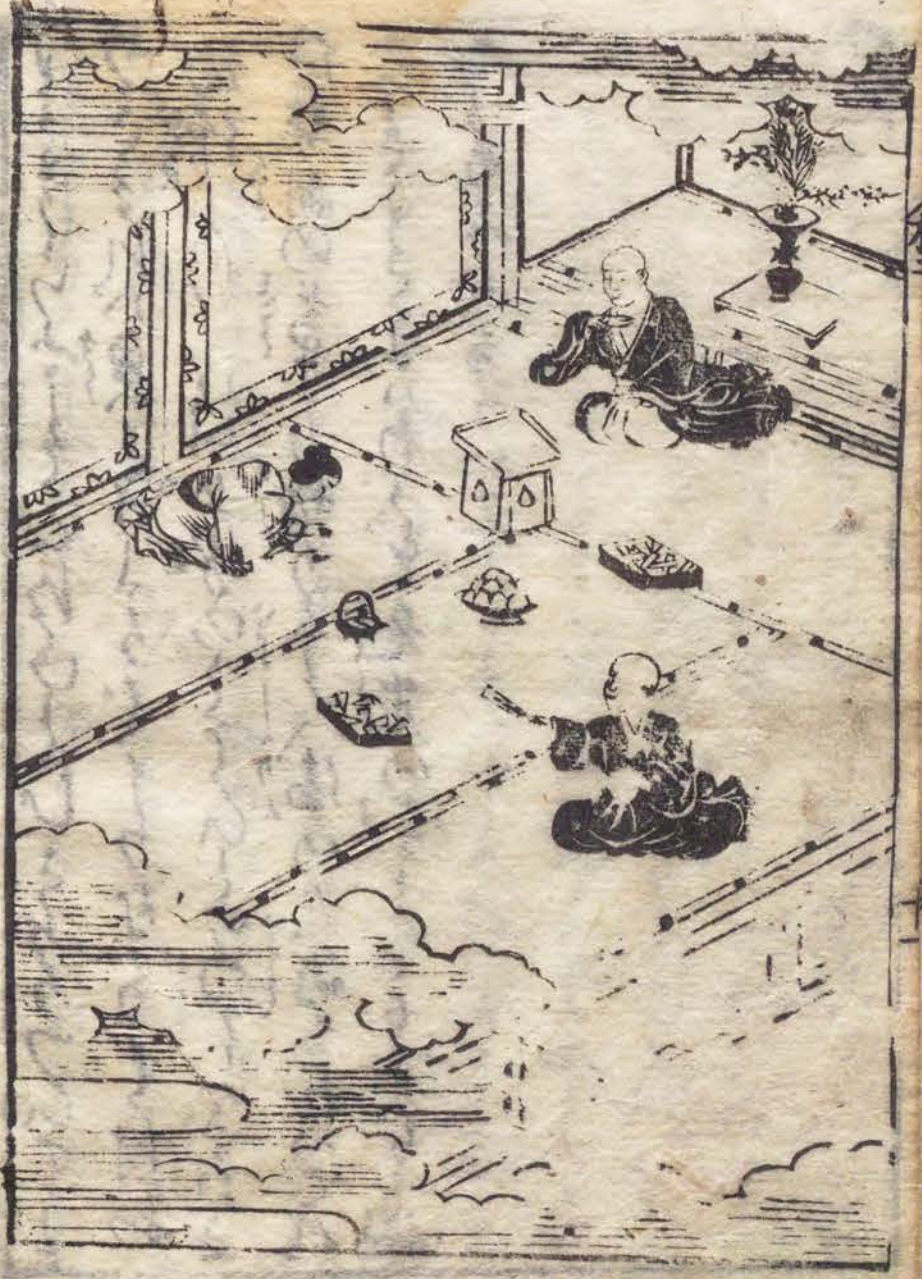
貸入心苦形よほくし 柳影は鳥の傍かちくもまら
 ぬいて動ともうとされよとのあひまればさへは我ま
 らのりてしもくは 休られいふもれと思ひしうら
 けより病よこしひより身れりふかほ度くへはむらう
 まくくまふが目まで肌かきり 又もあくとれと控
 とかりまや三十余の丸淋と細て若うは彼の
 とのまのこつまきくはの病りもてまふの今こ
 そ縁あめいよくんもてはよるをそしけり
 てうしといふさといま六七壺やぐりいりてつ
 くにきてしまつせける竹影をいひては行か

飛とうと大い眼とゆくとあしととらとらと
 やういそれかみ隙と後と後と撲られとんくちんいら
 としそれと申してや法仙のうはとしりそれの
 ろうすさるさほさしとくは女くとさういふ女れい
 りとねとそれいふ百生のるまあさまよはまうくを
 かきりいほれしう方とちとて見申はあうと惚りか
 く云統の影のうらまの曲事さうとぞいりりよ
 うの女りよ落その見かかしてとせとをれ我穿人
 とかりしとら維おぞや大ののまのの味はと
 只一服ももりさうとさうと 兼 迹より年久

しとつらふがさるれば何合赤縁のなつてつを
結つらむと相たうが所それなふしと進むされ日
このころ小神と女よ暇く暇よしとさされ日
見小笠やれぬよとこも教つて今もや
はなはれ帽のゆめゆめいふらのいふつとを
さよりとつ自のあつ途川の端とがよりあつこの
とぞんるしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
くすもよよとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

しとつらふがさるれば何合赤縁のなつてつを
結つらむと相たうが所それなふしと進むされ日
このころ小神と女よ暇く暇よしとさされ日
見小笠やれぬよとこも教つて今もや
はなはれ帽のゆめゆめいふらのいふつとを
さよりとつ自のあつ途川の端とがよりあつこの
とぞんるしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
くすもよよとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり





見よ味しかりてとあり度と云をり今
 目のとまきば人間の式は是れ美の二つが
 由てしと云きてこれにま控平おりて一相さく
 親くさしあしを清くあし二赤赤二が来やく
 みく寂くれむしよはぬまに於ゆりて肉をふし
 を此のあしをいふはまきなり人のいりハ本魅の
 しとくけしあしよりあきよしとふまき金の金持自若
 の物うけてあせしとりのなとわはくをよま
 いとがんとくらふいりやありまハ竹舞し女もま
 かの志ありやか余なれみるめあしとれいじや

夕
 夕

坂のえんあぐらうらうらう磯のしらごととをたぐり
らうらんとおれとやとおよよは付てあぐらとあぐ
一前まへはうふと迷懐まよひを
ささけささるものやらうらうてさめあしん
まま鬼おに鬼おに鬼おにいろうよとまねん
白しろい出でしてとらりささすうかまをねんがねん
助すけがうら極たぎに何なにのようなまきかへばあしとまに
一ひとんあふまをうらうらとねんやうらうらハハハ
うら途川とがうら生なれがうらあしこのあうはあう
けともるさ小神こがみとらさとりふれようあうとま

ままあうらうらうらうらこのあ腹はらとらうらあを鬼おにら
およしあうらけうらうらよとそりまねんおまひてに
一ひとんあうらうらあうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
小袖こそでうらうらうらうらうらうらうらうらうら
ひまをうらうらうらうらうらうらうらうらうら
ひまをうらうらうらうらうらうらうらうらうら
さまをうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
女このはうらうらうらうらうらうらうらうら

女この

美しきめははしおもひてまぐお袖
三途川もも既とちらるる

くついでて、長き川よりつくとまきとく
し横たれよとをれされはあつふ月也
にこそまおとく人出して我れとんくは頼頼
え少くまわらして仲かたなるよしはまけやう
ええいしうかしくて

縁付といふまららん一ゆと
よ何あらんもあしとく人
まらなげと縁もあつととまら一い

あやしくよるれむく人あはるるいさほあ
ちの親世も何れもて人老教の所利をすあ
流りなるれとやとくもゆひをよとつけ
おーろいあまきうおよしひらげつとくをれこ
とくはるあしと百通をうりててけをひろ号
築もがそととく双申よつらうまりあ少く流よか
さひありのむく美むくわきまむくひらう人よと
ホム人もとつとくのり絆を際をんさけよと
一はあさしとそまらうよけのひあよなりぬれ
あま女に殺欲求男のゆらうひけりよぬ美と女



伝ふありてはなほく子孫繁昌なり商の目午の
 目成の目け何は独えん何のしり定かづ
 御心やとれよよとらふよとらえれは
 あまよりふまゝされま
 名ありかゝらん祿いぬれ妻とこと
 くしうてとてしりしり
 世の中よみうしとるけまをりん
 扱れとてしりしり

又せうくそいひりける

あざんはよめおたしむり

とみさきむこよあふ事しり

あふいよめくさぐりて見布きとり物いひる

してま出りきよ又天下三世世のむしり

とていづれはつとけりしとていひきん

るうんごんてりてり女けいといて

りてちいひていづれがわりのあはく

えんどうやちりまはは始と遠てつり

大性かりけい太い海のものなれち

ホニ

ホニ

とつたをまよしり 時くふさハク

あふ人よんあけりるれとあや

縁組はあひ入一ま又よま

地地農とつてと後へとそつひ

とつがいのや我ホハ三十申

あふふくすけいを家業とま

世とよまらるるさやあを

あふふ百文ときたまき

とそりううそをいひて

とまがつひりり

ホニ

ホニ

して後いづれよまに美妻の浅めと人をも偽との居
ともけは下ハありのまくなり正房と親より入るを
ていふる妻ははよてけ色とて美妻と仕出く
なりりけり女いよく服とて嫁に一人を玉う家
みくらとていりさんくよ元をけ美妻玉いたり
いは職をこころまはかりとわいふを元よていざこ
みんたりしまを托とていしてすつとさんと踊出
てゆきよ遠とひさしく脚くともひいとく人
とよとよ成てそよめきよをりは下ちつとよとよ
まやまてきつとよのけ三世と戸ハる元現在未

来とてても名凶と考ゆとれなりととらうめく
すまふ先過去よて人の美妻とそよとらと執着
の念ゆくしとて現在よ悪女となる中よとハ
女中いんごうとく人ゆとわいふ名凶の端なり
悪名の焼土と種とて生いり人なれしその秋
さるる鬼のこしとて黒ふに度くわう先とらう
類ぬけあがり一生不嫁の悪眼かの通い何とや
是よ遠別が男のあえさう所射ハ執着眼悲
の鬼よ沈て来来又と業因といくはとてやと
らとてまは故男様とらう成よ面ハとよゆら

櫻の雪の鬼のさうと今みるこゝをたそりし
 くれかりハ推か内長ふとつせくと女乃教
 とどわけあしりまをよめまら一念の悪鬼と
 ずりいらくよを殺さんぞと歯ざりしを教とあら
 めらうそおとせハかたわけを此対法平
 わいその極のちうらまうぬまて
 いしハ鬼の心さうりける
 今一人乃美玉又くそつひける
 看るしてさまうくせん鬼女
 いろとも然もさうかんとし

不老不死の妙茶

お茶うれこもさ日蓮宗のありけつさつと
 飲んとしておさるさ娘と内羅よ甲りその時
 かさし合けりハりしをそ念仏の勢とさうた
 ち争い勝利のほよとありてハは死の妙茶の香
 的念仏のみまきまへハ日比唱ひする内題目
 とほとれさうと成仏さうしとて阿梨樹の
 枝のよくにありてかぶとさうさうそや健政とへ
 とし念仏よひ合てさう折さう一体その家れまへ
 さらやとさうしとれさうさうとさうひてれらるる

佛身一代をわのきひのままにとうとて捨いと
かきしえん是の心経とままにしはあの業よま
と心経とて引守りしめをまうりしよ
いろくと捨きまうりとも年比のけい約をれ
とてゆるししらなり清ちり波家ハカ
よあさり得れらふ及力ゆるるあ小堀川のきを
た地獄の念仏を捨むるらとて
一肯とけりなり
念仏とむらんくとまあうらあいそん
浄土とあむ

とつひとらまればとんとりあんど
まいたのじえん生地獄よちらあきし
とくんとんためよあへこそゆけ
とて麻子よとてやうういせ捨へハ用はして
ゆりしとらうばためしゆるされがうら
とらまがあう術と捨捨らんたりとてこれ
捨しては死れらるる腹中よ入用舎の利益を
かとうとてとてとてあふさる男らとては
いさくとの捨ふりの外ハハハの捨女と
とてとて愛成男子則得成仏疑ひあくと

ひさのめあぢあぢ人なれにやうそで 飯る飯のてく
あしてひえくらきう飯りさあうまは 飯鬼のへた
らあういよとて 控るく 飯鬼をえいつさねけ須弥を
のうす 飯うとま 飯はあまをそあうくと 昭けり
こして 南無阿彌陀院の文字は 結城してとがぬを 飯て
わのしめるあまいさでいささななりとて又こもあ
とのませしきりもよしていよくらうにうつしんか
いふしきさしんらうとらあていぬぬとて人よや
か女房子くも 花もふあつたりとて 念仏のりり
いら内とれとらうとてよばらして けせえらうとていもうとて

やあまいたたーや 南無妙法蓮華經を 傳さともめさ
らうとこれあまは 隣あいららとて ねどろき けあり
あうつたーや けまいひまーくをーまらうとあま
らあうらよあま 飯ーひとまらあまぬらーとて
むねーけとらうとて けなり女房子とてハ 飯
いひてさきさういともふかめいあまれけりまねを
飯とて 呼てともがら 後合をーとて だれれ
ららーまらうは 竹女をさうていさや ね 藤治を 飯
のまらうとていさや けとていさや けり 竹女を
ららうとて ね 飯子とていさや けり けり けり けり

九二

此腫の強はし無故なるれどもしてぬらるる痛^{あつ}
 なるもけ^く素^くく^く入^くれ^くん^くと^く包^く出^くる^くの^くこ^く
 ま^くり^くあ^くけ^くる^く小^く眼^く中^くに^くつ^くき^くし^くと^くひ^くこ^くを^くれ^くる^く
 人^くく^くた^くえ^くれ^くれ^くも^くこ^くも^く大^く腫^くを^く起^くす^くて^くい^くふ^くく^く
 なく^くぬ^くま^くを^くさ^くり^くし^く小^く便^く濁^くの^くし^くり^くて^くら^く
 ま^くら^く版^くを^くら^くそ^くら^くと^くなり^く常^くの^くや^くり^くな^くら^くし^く
 ま^くれ^くい^く度^く中^くけ^くひ^く極^くよ^くた^くと^くま^くり^くん^くの^くも^くあ^くし^く
 り^くま^くら^くく^くあ^くら^くい^くふ^くと^く公^くね^くに^くほ^くひ^く信^くま^くら^くし^く
 ら^くも^く日^く中^くは^くあ^くら^くい^くふ^くと^くま^くり^くん^くの^くほ^く地^く
 ら^くり^くし^くか^くめ^くま^くや^くと^くら^く小^く便^く濁^くを^く起^くす^くて^くこれ^くを

一のゆかり名義のりよ思て是ハ毒ハ付^く
 の形^くも^くい^くふ^くい^くふ^くや^くり^くし^く竹^くを^くて^くい^くふ^くと^くは
 も^くれ^くか^くり^くな^くま^くは^く五^く倍^く子^くと^くい^くひ^くて^く積^く毒^くあ^くら^くま^く
 ば^く一^くて^くか^くめ^くら^くま^くを^くら^くえ^く半^くの^く相^く方^くを^く起^くす^くて^く
 くり^くり^くは^くぬ^くら^くら^くけ^くし^くし^くり^くか^くと^くよ^くも^く絶^く
 て^くい^くり^く世^く中^くに^くあ^くら^くい^くふ^くと^く



一ノ
 二ノ

三ノ